

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-23

「どんなラインアップか、漁っておきます」と真紀はことさら軽口をたたいて自身の緊張をほぐしてから、「少し迷いましたが、思い切って言ってしまいます」と硬い表情を浮かべて語り始めた。

秋の日差しを受けてフロントガラスの底がきらりと光った。

「聞いていられなくなったら、いつでもストップをかけてください。ご存じでしょうが……パブロ・ピカソの《青の時代》と呼ばれる三年間への契機は、かけがえのない親友の悲恋による自殺が一要因とされています。その時に描かれた作品、『死せるカサヘマス』は、死、苦悩、絶望などが、もの悲しく、哀愁を帯びて表現されています。そこで、先ほど聞いて頂いたピアフの『青のシャンソン』……」と言いかけた時に、助手席から特別な何かの気配を察した真紀は、話を途中で断念せざるを得なくなった。

走行音だけの中で、しばらく沈黙があってから、「そのまま続けて」と横田が促した。

真紀は水分を補給したい気持ちを押さえていた。横田の微妙な反応を読み解いて、正解に近い確信を素早く得ると、またしゃべり始めた。

「……『青のシャンソン』と《青の時代》を結びつけるのは、プルシャンブルーにかこつけた言葉遊びなんかではありません。最愛の人の事故死や大親友の自殺によって、二人の天才が残した青色に纏わる二十世紀の芸術遺産の事です。男女の違い、死因の違いこそありますが、愛の普遍性を求め続けた壮烈な姿勢に強く惹かれます。『青のシャンソン』を選曲した訳は、今度の制作過程で、ショパンの『バラード第一番』やナパバレエワインの『オーパス・ワン』や、そのほかモデルにしても、たくさん楽しませてくださったことへの、私なりのささやかな企みだと受け止めてください」

話し終えた真紀は、果して自分の思いを理解してもらえたのだろうか、と、運転上の都合でバックミラーを操作しているように見せかけて、鏡に映る横田の顔を盗み見た瞬間、目と目が合ってしまった。

「よそ見をしてちゃ危ないよ」と横田は薄笑いを浮かべて注意した。

真紀は慌ててバックミラーをもとに戻してから、気恥ずかしさに顔をしかめた。

「ささやかな企み……？それとも貴女の空想……？どうせなら、四の五の言わずに、ピアフの歌を聴かせてもらったほうが良かったかな。生兵法は大怪我のもとだよ」と横田は露骨に嫌味を言った。